令和5年度（2023年度）赤野井湾における真珠母貝生産実証事業の効果調査

佐野聡哉・井戸本純一・孝橋賢一

１．目　的

本県における淡水真珠養殖業の再興のためには、真珠母貝の増産が必要である。加えて、母貝生産の拠点となる水域は、水質等の環境変化による生産不振に備えて多数存在することが好ましい。そこで、近年は漁場環境が改善傾向にある赤野井湾において、実証試験として事業規模での母貝生産を行い、真珠母貝生産拠点としての評価を行った。

２．方　法

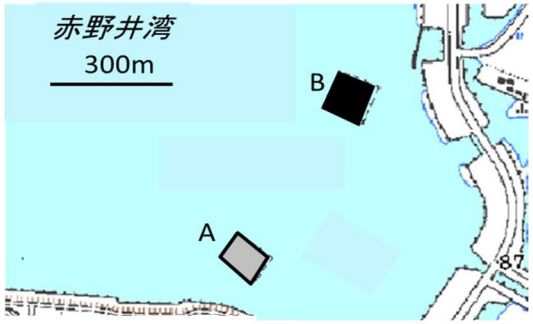
2022年10月に赤野井湾内の真珠養殖漁場（図1）のA漁場に2,700個およびB漁場に300個の稚貝を垂下した。各漁場に垂下した稚貝から無作為に抽出した各100個体について、2023年の3月と11月、および垂下から1年半経過した2024年3月に測定を行い、生残と成長の推移を調べた。生残は、1個体ずつ目視で生死を確認し、死殻がなく行方不明の個体については死亡したものとして取り扱った。成長は稚貝を写真撮影し、パソコン上で画像データから殻長を測定した。

３．結　果

垂下半年後の2023年3月の生残率は、A漁場80%、B漁場98%であった。その1年後の2024年3月はA漁場70%、B漁場81%であり、垂下1年半後の生残率として過年度5カ年（稚貝垂下年H28、H30 、R1、R2、R3）の平均78.9%と同程度であった（図2）。

平均殻長は、垂下時17.0㎜が1年半後にはA漁場75.0㎜、B漁場76.5㎜まで成長した（図3）。これも過年度5カ年の平均81.2㎜と同程度であった（図4）。

これまでの結果から、生残率と成長が共に安定的に良好であり、赤野井湾は沖出し後の母貝の生産拠点になりうると考えられる。



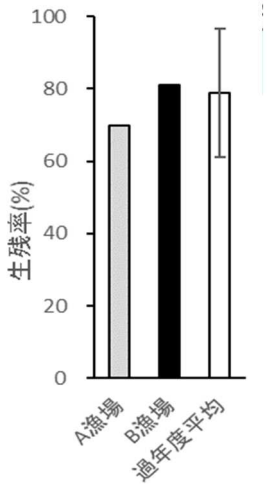


図2 垂下1年半後の生残率（エラーバーは標準偏差）

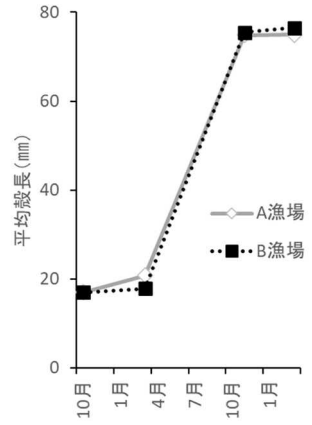


図3 両漁場における平均殻長の推移

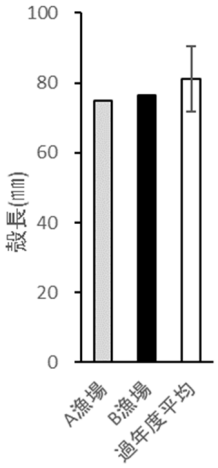


図4 垂下1年半後の殻長（エラーバーは標準偏差）